



浅 葱 色 の 出 会 い
 新 刊 紹 介
 レファレンスブックあれこれ
 視 聴 覚 資 料 案 内
 図書館 2007年4月2日リニューアルオープン！
 お 知 ら せ

浅葱色の出会い

図書館長 松 本 茂 樹

半年余りの改修工事を終えた図書館内部は開架書棚の増設以外にもいくつかの模様替えが施されている。1階の北西隅に設けられた「語学学習室」という小振りの閲覧室も新しく生まれたスペースのひとつで、天井まで届く褐色の木製書棚や什器の落ち着いた雰囲気、利用される方々に気に入って頂ければ幸いである。「藤棚」を御覧頂いている今ではこの小閲覧室の呼称（愛称）も定まっていることと思うが、実は小職がこの稿を認めている“今”はまだ図書館員達から寄せられた思い思いの呼称の候補案が館長室の大きめのホワイトボードを埋めている。

自身も図書館の一員としてこの素敵な小空間が異文化との出会いや甲南大学に学ぶ海外からの留学生の方々との交流の場ともなることを願いつつ親しみやすい呼び名を考えようとしてはいるのであるが、なかなかこれが難しい。これといった妙案が浮かばないままに、留学生の受け入れ窓口である国際交流センターには「あじさいの一む」と呼ばれる交流スペースがあることや、図書館の「藤棚」の藤色のイメージ、さらに「出会い」というキーワードに思いを巡らしているうちに、ふと俳聖芭蕉の「紫陽草や帷巾時の薄浅黄」という句が心に浮かんだ。句の意味は「帷子を着用する時節になって紫陽花が薄浅葱色（淡青色）に咲いている」という（だけの）ことなのだが、この句の面白さの在処を安東次男（の著書）^{あんどつぐお}に教わった思い出がある。紫陽花は白から青さらに赤紫と、時候の移り変わりとともに色を深めていく花であり、一方帷巾は（『和漢三才図会』に説く如く）「青から薄青さらに白と、段々と色を浅くして用いる夏衣」である。すなわち、片や天地草木の自然の摂理により一雨毎に深まっていく花の色と、片や人の世の習わしで浅く変わっていく衣替えの色が、束の間、浅葱色の時空で出会い擦れ違っていく印象を一句に詠み込む芭蕉の非凡を安東はいうのである。自然と人事が変化の相のもとで浅葱色の出会いを果たすという芭蕉の着眼には舌を巻くが、変化と不変を見据える俳諧師の面目躍如というところでもあるのだろう。

さて、この洗練と機知に富む上質の古典文芸を隠し味にして、「語学学習室」の親しみ易く且つ味深い愛称を何とか捻り出すことは出来ないものだろうかと思案投げ首を繰り返しつつ、館内での熱の籠もった“名付け親レース”の成り行きを見守っているというのが小職の今日この頃である。

拙い雑文に最後までお付き合い頂き有り難くもまた申し訳ない限りであるが、（今や呼称の定まった）「語学学習室」を含め、改修後の図書館の新たな趣向と装いのなかに、その時々目的や心持ちにマッチした利用法や楽しみを見出して頂ければ何よりである。